

子どもの描画に見られる文化の影響 「南米につながる子どもたち」とブラジルとペルーの子どもたちの比較から

塚本美恵子

【要約】 言葉を介さない映像は、世界の誰もが理解できる教材だと考えられがちだが、アメリカで実施した視聴調査では約4割の子どもたちが実際に映像で見た2段の雪だるまではなく3段の雪だるまを描いた。この調査では言語教育方針の異なる3校で3段の雪だるまを描いた子どもたちの割合に、結果に差が見られ、一番多かったのが特別な言語教育を行っていない学校、次いでスペイン語と英語のイマージョン校、最も少なかったのが日英バイリンガル校だった。子どもたちの描画は学習言語の背景にある文化の影響が認められたが、学習言語の背景文化に加えて、居住する地域や国の文化の影響も受けているのではないかと予想された。そこで日本で育つ「南米につながる子どもたち」と、彼らの母国ペルーとブラジル在住の「日系人学校の子どもたち」を対象に同様の調査を行った。本稿では、これらの回答のうち小学校4年から6年生のデータに絞って再分析を行った結果、在日の「南米につながる子どもたち」と在ペルーとブラジルの「日系人学校の子どもたち」では有意な差が認められたことから、子どもたちは居住国の文化の影響をも受けたvisual imageを保持していることが明らかになった。

【キーワード】 視聴調査、文化の影響、子どもの描画、南米につながる子どもたち、visual image

1. はじめに

筆者はこれまで映像を活用したさまざまな教育実践を行っている。2010年からは科研費の助成を受けて2期6年間、映像視聴に見られる文化の影響について調査研究を行ってきた。

この研究は当初、映像教材が言葉のわからない子どもたちにも内容理解を容易にし、言語習得に有効であることを立証することを目的に、日本国内での予備調査後にアメリカでの視聴調査を開始した。

調査方法は、子どもたちの視聴の様子を録画し、何秒間映像を注視しているかを一人ひとり測定するフォーマティブ・リサーチと、質問紙を併用して実施した。フォーマティブ・リサーチの結果からは、日本語を全く理解しないアメリカの子どもたちが平均60%以上という高い注視度で映像を視聴していたことが確認され、映像教材の有効性が確認された(塚本 2010)。

質問紙調査からもさまざまな結果が明らかになった。質問紙では言葉による自己表現が充分ではないバイリンガルの子どもたちに配慮して「最も印象に残ったシーンを絵または文字」で回答して

もらった。上映した映像は日本製で、物語の鍵となるシーンで2段の雪だるまが現れる。ところが子どもたちの描いた絵の中には、3段の雪だるまが複数あった。子どもたちは見てもいない3段の雪だるまを何故描いたのか、という想定外の原因を探るうちに、現地教員から「子どもたちの中には3段の雪だるまを描く子どもがかなりいる。おそらく冬季に低学年の教室の窓に飾られた雪の結晶や3段の雪だるまを見るうちに、こうしたアメリカ文化の影響を受けたのではないだろうか」との指摘があった。この指摘を契機に、研究目的を「どの程度の子どもたちが、3段の雪だるまを描くのか」に変更した。つまり、どれ程の割合の子どもたちが、映像を見たまま記憶(記銘と保持)し、保持された内容を「想起」「再生」せずに文化の影響を受けたイメージを再構成しているのかを実際の視聴調査から明らかにすることと、同時に各地の調査データを比較検討することで子どもたちの映像記憶の要因を解明することを目的とした。その後は、調査対象者全員に映像で見た雪だるまの絵を描くように指示して調査を継続したところ、言語教育方針の異なる3校では差があることがわかつ

た。特別な言語教育を行っていない平均的なアメリカの子どもの状況を示すと予想されたC校で3段の雪だるまを描いた者の割合が47%と最も高く、次いでスペイン語イマージョン校B校で39%、そして最も低かったのが日英バイリンガルプログラムのA校の25%である(塚本 2012)。その後に行った視聴調査では全学年の子どもたちの描画に一定数の3段の雪だるまが見られた(塚本 2013)。

日本在住の子どもであれば、おそらく雪だるまを3段で描く者はほとんどいないだろう。したがって日本語と英語のバイリンガル教育を実施しているA校で3段の雪だるまを描いた児童の割合が最も低かったのは、言語の背景にある日本文化が影響を与えていると考えられた。しかしスペイン語イマージョンプログラムを実施するB校でもC校と比べるとその割合が低くなっている。この理由は何なのだろう。そこにはA校同様、言語の背景にある南米あるいはヒスパニック文化の影響があるのではないかと考えられた。つまり、南米圏ではアメリカ程、雪だるまを3段で描かないのではないかと仮説を立て、検証することにした。

2013年からは、日本と南米の学校を調査対象校として視聴調査を行った。同じような言語教育方針で運営される在日のブラジル人学校と、ブラジルの日系人学校5校で調査を実施し(塚本 2016a)、さらに在日の南米系外国人学校とペルーの日系人学校、加えてペルーのインターナショナル校での調査を実施した(塚本 2016b)。これらの結果はすでに報告しているが、対象とした子どもたちの年齢にかなり幅があることから、本稿では調査データを小学校4年生から6年生までの回答に絞って改めて再分析を行った。また2013年には『アナと雪の女王』*の映画が世界的に大ヒットしたこともあり、日本の子どもたちが雪だるまをどのように描くかを再確認するために、関東地方のK公立小学校にも調査を依頼し比較検討した。

2. 研究の方法

2.1. 研究方法と使用映像

視聴調査はアメリカでの結果と比較できるように同じ方法で行った。各校とも授業は担当者が主導し、母語で筆者を紹介した後に日本のアニメを見せることを伝えた。上映後に母語で書かれた質問紙に「今見た映像の中に出てきた雪だるまの絵を描いてください」と指示した。使用したのは宮沢賢治原作のアニメ『雪渡り』で、日本の(株)ハリケーンフィルムズ(現/株式会社サイプラス)が制作した日本語版(日本未公開)と、その英語とスペイン語版『Crossing the Snow』(Multicultural Kids Inc.)である。作品は人間の子どもたちが不思議の森に住むキツネたちが開催する幻灯会に招待されて相互に信頼関係を築く内容で、イギリスの放送局S4Cが主催したAnimated Tales of the Worldシリーズの一つとして制作され、海外の多くのテレビ局からすでに放送された質の高い作品である。今回の調査対象とした「雪だるま」のシーンは、14分弱の作品の中で主人公たちが森へ行き、キツネたちが作った「雪だるま」を見つける物語の鍵となる場面である。



図1.『雪渡り』の1シーン@サイプラス

2.2. 視聴調査(調査対象校と実施時期・回答者数)

今回分析したのは、在日の「南米につながる子どもたち」としてブラジル人学校と南米系外国人学校、そしてブラジルとペルーの「日系人学校のこどもたち」として南米のブラジルとペルーの日系人学校に在籍する小学4年生から6年生の子どもたちの回答である。加えて比較検討するために、ペルーの「インターナショナル校」と、日本の関

塚本：子どもの描画に見られる文化の影響「南米につながる子どもたち」とブラジルとペルーの子どもの比較から

東地方にある「公立小学校のこどもたち」の4年生から6年生の回答も分析した。

日本のブラジル人学校と南米系外国人学校、ブラジルの日系人学校、ペルーの日系人学校では1回目に日本語を上映し、ペルーのインターナショナル校と日本の公立小学校では1回目は英語版を上映した。以下、調査対象とした学校と調査時期、対象学年の人数を示す。

a. 「南米につながる子どもたち」調査対象校

協力を得たのは、東海地方にあるブラジル人学校H校と南米系外国人学校M校で、H校とM校のブラジルクラスではブラジルと同じ教育課程をポルトガル語で行っている。M校ペルークラスではペルー本国の教育課程の授業をスペイン語で実施している。H校の調査は2013年8月に実施し、4年生15名、5年生17名、6年生13名の計45名の回答を分析した。M校では2014年3月にブラジルクラスの4年生10名、5年生10名、6年生11名の計31名、さらにペルークラスの4年生4名、5年生2名、6年生3名の計9名の回答を分析対象とした。H校とM校のブラジルクラスとペルークラスの総数85名の回答を「南米につながる子どもたち（H, M校合計）」とした。

b. ブラジル＆ペルー「日系人学校の子どもたち」

ブラジルでの調査は2014年3月にサンパウロ市内にあるO校、P校、C校、J校の4校の協力を得た。O校とP校は1930年代に創立された歴史ある日系人学校で、C校は2006年に日系人団体によって設立された政府公認の私立小学校、J校は社団法人が運営する日本語学校である。参加者の学年と人数は、O校の4年生6名、5年生3名の計9名、P校は6年生1名、C校は4年生9名、5年生4名、6年生2名の計15名、J校は5年生の1名で、合計26名である。

ペルーでの調査は2014年9月に実施した。首都リマにあるV校は1948年に開校した日系人学校で、4年生27名、5年生26名、6年生31名の計84名の回答を分析の対象とした。南米のブラジルとペルーの日系人学校に在籍する4年生から6年生の総数110名を「日系人学校の子どもたち（O, P, C, J, V校合計）」とした。

c. 日本の「公立小学校の子どもたち」

今回は、日本の児童が雪だるまを3段で描くことがあるかを確認するために、参考データとして2016年1月に国内の関東地方にある公立小学校K校の4年生28名、5年生36名、6年生41名の計105名にも協力を得た。

d. ペルーの「ペルーインターナショナル校」

a. 「南米につながる子どもたち」、b. ブラジル＆ペルー「日系人学校の子どもたち」、c. 日本の「公立小学校の子どもたち」との比較を明確にするために、ペルーのインターナショナル校F校の4年生から6年生の148名のデータ（塚本 2016b）も参考までに示した。

2.3. 分析方法

分析方法は、1回目の上映後に子どもたちが描いた雪だるまを分析の対象とした。子どもたちに提示した映像は前ページの図1で、日本の制作会社の作品のため私たち日本人には見慣れた2段の雪だるまとなっている。一方、図2に示したのは、日本の南米系外国人学校M校の児童が描いた「3段」の雪だるまである。分析は子どもたちが、雪だるまを「2段」の絵で描いているか、「3段」に描いているか、それとも「その他」の絵を描いているか、で分類した。



図2 南米系外国人学校児童が描いた雪だるま

表1 在日「南米につながる子どもたち」とブラジル & ペルーの日系人学校での調査結果

実施国	調査対象者	対象学年	2段の人数	3段の人数	その他	合計人数
日本	南米につながる子どもたち(H,M校合計)	4～6年生	80(94%)**	3(3%)*	2(2%)**	85
	公立小学校の子どもたち(K校合計)	4～6年生	101(96%)	0	4(3%)	105
ブラジル&ペルー	日系人学校の子どもたち (O,P,C,J,V校合計)	4～6年生	81(73%)**	17(15%)*	12(10%)**	110
ペルー	ペルーインターナショナル校 (F校)	4～6年生	91(61%)	43(29%)	14(9%)	148

+p<.10 *p<.05 **p<.0

3. 分析結果

日本、ブラジル、ペルーで実施した調査結果を表1にまとめた。項目は左から「実施国」、「調査対象者」、「対象学年」、2段の雪だるまを描いた者の数「2段の人数」、3段の雪だるまを描いた者の数「3段の人数」、それ以外の絵を描いた者の数「その他」、そして「合計人数」である。比較検討できるように、日本の公立小学校K校での結果と、ペルーのインターナショナル校F校の結果も灰色の字で掲載した。

日本の「南米につながる子どもたち(H, M校合計)」（以後は校名を省略）を見ると、2段の雪だるまを描いた者は94%で、その割合は日本の「公立小学校の子どもたち」の96%に近い数値となっている。しかしブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」ではその数値は73%と下がっており、在日の「南米につながる子どもたち」との差は21%と、2段の雪だるまを描いている者の割合が少ないことがわかる。

一方、3段の雪だるまを描いたのは日本の「公立小学校の子どもたち」では一人もおらず、日本の「南米につながる子どもたち」では3%が3段の雪だるまを描いた。しかしブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」では15%が3段の雪だるまを描いており、在日の「南米につながる子どもたち」と比較すると割合が高くなっている。

日本の「南米につながる子どもたち」とブラジル&ペルーの「日系人学校の子どもたち」の間で、「2段の人数」、「3段の人数」、「その他」に有意な差が認められるかどうかを検討した。日本の「公立小学校の子どもたち」は3段の雪だるまを描い

た者はゼロだったことから分析対象から外して、カイ二乗検定を行った。その結果、表1に*印で示したように、日本の「南米につながる子どもたち」は、ブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」よりも2段の雪だるまを描いた者が有意に多く、3段の雪だるまを描いた者が有意に少なかった。

本研究の結果をまとめると、以下ようになる。

1. 在日の「南米につながる子どもたち」は、ブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」よりも2段の雪だるまを描いた者の割合が多く、その数値は日本の「公立小学校の子どもたち」の値に近かった。このことは、日本で育つ「南米につながる子どもたち」は日本の文化の影響を受けた2段の雪だるまを描く傾向が強いと言える
2. ブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」は、日本の「南米につながる子どもたち」よりも有意に高い割合で3段の雪だるまを描いた。このことは、ブラジルとペルーでは、雪だるまを3段で描く者が日本よりも多いことが明らかになった。この結果は同時に、ブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」もまた、ブラジルやペルーの国や地域文化の影響を受けていることが示唆された。
3. 在日の「南米につながる子どもたち」の中にも3段で雪だるまを描いた者が3%いたことから、彼らの中にも南米文化の影響を保持している者が一定数いることが明らかになった

4. 考察

子どもの映像視聴能力の研究は1980年代に日本でも広く行われた。例えば村川・水越(1984)は、エスキモーの暮らしの映像を日本・シンガポール・スリランカの児童生徒に視聴させたところ、生肉を食べるシーンを「気持ちわるい」と評価する者が多い国や、逆に肯定的に評価する児童が多い国など地域や文化によって評価が異なったことを報告している。国や地域によって解釈や評価の違う事例は異文化間教育や異文化コミュニケーション等の領域でも数多く報告されている。見たものをどう言語化して表現するかは文化により違いが見られる。例えば虹の色の数では、日本人の多くは七色と答えるが、アメリカでは六色、フランスでは五色と国や地域によって異なることが報告されている（平成17年度一橋大学附属図書館企画展示）。これは太陽光線をプリズムで分解したスペクトルをどこで区切って言語化するかの問題で、国による文化的な要因が大きく作用する。太陽の色も日本では一般にオレンジや赤と言われるが、英語のクロスワードパズルではyellowになる。しかし本研究のように、映像視聴後の描画で、文化の影響が認められたという報告は多くない。

本稿では、アメリカで実施した視聴調査の結果、特別な言語教育を実施していない学校よりもスペイン語イマージョンプログラムを実施する学校の方が3段の雪だるまを描く者の割合が低かった理由を明らかにするために、①日本在住の「南米につながる子どもたち」と、②彼らの母国のブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」で比較検討を行った。また比較検討することを目的に、③ペルーの「インターナショナル校の子どもたち」(英語を教授言語としていることからアメリカ文化の影響が強く認められると予想された)と、さらに④日本の「公立小学校の子どもたち」を対象に視聴調査を実施して比較検討した。

その結果、日本の「公立小学校の子どもたち」では3段の雪だるまを描いた者は皆無で、在日の「南米につながる子どもたち」では3%にしかすぎなかった。これは日本で育つ子どもたちは日本文

化の影響を大きく受けていることが示唆された。一方、ブラジルとペルーの「日系人学校の子どもたち」では3段の雪だるまを描いたのは15%で、その割合は日本よりも高かった。またペルーの「インターナショナル校」ではその割合は29%と更に高くなっており、アメリカ文化の影響を強く受けていると考えられた。この数値はアメリカのスペイン語イマージョン校B校の39%には及ばないものの南米での調査で最も高い数値となっている。

これらの結果から、南米のブラジルとペルーではアメリカ程3段の雪だるまを描く子どもたちの割合は高くないことが明らかになった。

5. おわりに

映像視聴の研究にはさまざまな調査が実施されるが、最も一般的に使用されるのが質問紙である。質問紙で回答ができない乳幼児などを対象とした視聴調査ではeye trackingや脳波などを測定する等のさまざまな方法で実施されているが、こうした機器を使用すると、調査対象の人数が限定される。一方、質問紙調査は多くの対象者を調査できる長所があるが、回答を言語化する段階で文化の影響を受ける。本研究ではバイリンガル児童を対象として行うことを前提としたことから、言葉がわからない児童でも絵で表現できるようにと描画で回答を求めたことで結果的に言語化に伴う文化の影響が軽減されたと考えられたが、それでもなお、子どもたちは育つ文化の影響を受けたvisual imageを保持していることが明らかになった。

映像は言葉の壁をやすやすと乗り越える世界共通のメディアだと考えられてきた。しかし「見ればわかる」と考えられる映像も、その理解や記憶には視聴者の背景文化がさまざまな形で影響を与えている。本研究の調査対象数は少なく調査結果を広く一般化するにはさらなる研究が求められるものの、映像を教育分野で有効に活用するには、見たものを子どもたちがどのように記憶するかといったプロセスにおける文化の影響に関する研究の一助となろう。また同時に、映像を教材として利用する教員や教育関係者が映像視聴や理解には

文化による影響が認められることを広く認識しておくことも忘れてはなるまい。

注＊『アナと雪の女王』(原題:Frozen)は、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ製作による2013年公開のアメリカ合衆国の3Dコンピュータアニメーション・ミュージカル・ファンタジー映画。2013年度アカデミー長編アニメ映画賞受賞作品。

謝辞

本調査に協力いただいた各校の先生方及び関係者の方々に感謝申し上げます。

本研究は平成25年～27年度日本学術振興会科研費・基盤研究(C)25350349「映像メディアの教育課題向上に関する研究」[課題番号研究代表者：塚本美恵子] による助成を受けています。

引用文献

平成17年度一橋大学附属図書館企画展示、虹は本当に七色か
<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/owen/rainbow-color.html> (accessed 2016.08.21)

村川雅弘、水越敏行 (1984) 視聴覚教育研究 15、p1-17

塚本美恵子 (2010) 「アメリカの小学生は日本語版アニメをどう視聴したのか - 注視度と質問紙調査の回答から -」『文化情報学』第17巻第2号、駿河台大学メディア情報学部、p1-11

塚本美恵子 (2012) 「アメリカの児童は”雪だるま”をどう描いたか」異文化間教育学会第33回大会発表抄録 p90-91

塚本美恵子 (2013) 『子どもたちは何を見ているのか—教育現場における映像教材の活用—』デジタルパブリッシングサービス
ISBN978-4-86143-090-9

塚本美恵子 (2016a) 「子どもの描く『雪だるま』から見る文化の影響—在日ブラジル人学校とブラジル日系学校での視聴調査から」『メディアと情報資源』第22巻第2号、駿河台大学メディア情報学部、p11-22

塚本美恵子 (2016b) 「在日ペルークラスとペルーでの視聴調査から描画に見られる文化の影響」『メディアと情報資源』第23巻第1号、駿河台大学メディア情報学部、p23-31

塚本：子どもの描画に見られる文化の影響「南米につながる子どもたち」とブラジルとペルーの子どもたちの比較から

Cultural Influences on Children's Drawings: Comparison between Brazilian and Peruvian Drawings in Japan and Japanese Drawings in Brazil and Peru

by Mieko Tsukamoto

[Abstract] Visual image is regarded as a communicative tool used worldwide that enables us to understand without languages. However, results of audio-visual surveys conducted in three schools in the U.S., a Japanese bilingual school, a Spanish immersion school, and a monolingual school contradicted this; the data showed that about 40 percent of children drew snowmen composed of three balls of snow after watching a film showing snowmen constructed of two balls of snow. The results also revealed that these percentages among three schools were different: the monolingual school had the highest percentage, followed by the Spanish immersion school and then the Japanese bilingual school. The results substantiate a hypothesis that children's drawings may be affected by their cultural background. To verify this, in this study, data on children's drawings from Brazilian and Peruvian schools in Japan and Japanese schools in Brazil and Peru were collected and analyzed. Data regarding fourth to sixth graders were used to eliminate the age factor. The results showed significant differences between Brazilians and Peruvians living in Japan and Japanese living in Brazil and Peru and supported the hypothesis.

[Keywords] visual survey, cultural influences, child's drawing, Brazilians and Peruvians living in Japan, visual memory